

目的 着装評価特性を解明するための前段階として、パネルの違いによ、て生じる判定の差異を検討した。また、より着心地よい衣服原型を設定することを第2の目的として、*chest line*位でのゆとりについても検討した。

方法 実験は基準服を用いた一対比較法とシェッフェの一対比較法で行った。パネルは熟練した3名によ、て構成されるオープン・パネル、クローズド・パネルおよび被検者自身である。実験の要因と水準は「胸幅」「背幅」「袖山の高さ」「被検者」各々3水準であり、直交表 L_9 にわりつけた。正常姿勢への適合性については、「前身頃」「後身頃」「袖」「全体」の外観を視察判定し、動作適合性については、日常動作と基準に設定した15動作について被検者のみが判定を行、た。実験服ごとに5段階で判定し、基準服を用いた実験データは累積法で解析を行、い、シェッフェの方法を用いた実験データは、その解析手順に従い分散分析した。

結果 1) 基準服を用いた実験においても、シェッフェの方法を用いた実験においてもクローズド・パネルおよび被検者に比べオープン・パネルの判定精度は明らかに高く、その判定内容も信頼に足るものと思われた。2) 日常着として外観の優れる形態の設定条件は「胸幅」「背幅」ともにY式原型より1cm狭く、「袖山の高さ」は身頃の袖ぐり寸法の1/2の組合せであることがわかった。3) 日常動作について適合性の高い形態の設定条件は、「背幅」がY式原型の背幅より1cm広く、「袖山の高さ」は身頃の袖ぐり寸法の1/2の組合せが適当であることがわかった。